

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izumo

第二章 クルンバー館の奇妙な住人

ブランクサムの家は、英国の大地主の家に比べればみすぼらしく見えるだろう。けれども、長い間息の詰まるような間借り生活をしてきたわたしたちにとっては、豪邸に見えた。

赤い瓦屋根の、低く横に長い建物。菱形の格子がはまった窓。部屋数は多く、壁にはオーク材の腰板が張ってあったが、天井はすすで汚れていた。前庭の芝生を囲う山ブナはこぶだらけで、潮風のせいで枯れている。屋敷の後ろには、せいぜい十二、三軒くらいだろうが、ブランクサム・ビアの村落があった。住人は、地主を守り神のように崇める素朴な漁師たちだった。

西には広々した黄色い浜とアイルランド海が開けていたが、それ以外は見渡す限り荒地だった。近くは灰色つばい緑、遠方は紫がかつた景色が、地平線のかなたまで湾曲しながら続いている。このウイグタンの海岸は、なんて荒れ果てた寂しい場所なのだろう。この先どれほど歩き続けても、生き物一つお目にかかれなさに違いない。目につくのは、鋭い声で鳴き交わしながら、羽音高く飛んでいる白いカモメの姿ばかり。

村を一步出れば、人が生活している印は何もない。ただ一つ、クルンバー館の白い塔だけが、モミヤカラマツの林の中に聳え立っている。まるで巨大な墓石のようだ。

この大邸宅はわたしたちの家から一、二キロのところにあった。建てたのはグラスゴーの裕福な商人で、人間嫌いで風変わりな趣味の持ち主だったらしい。そこは、わたしたちが越してくるだいたい前から空き家になっていた。壁は風雨でまだら模様になり、窓はうつろな目のように丘を見下ろしている。こんなに荒廃した空き家でも、漁師たちにとってはありがたい目印だった。時化の日には、地主様の煙突とクルンバー館の白い塔をつなぐ一直線上に船を進める。そうすれば、ぎざぎざの背中を突き出した、眠れる怪獣のような暗礁にぶつからずにすむ。それを経験から学んでいた。

この荒地にわたしたち三人を連れてきたのは、運命のいたずらとしか言いようがない。これほど寂しい場所でも、わたしたちは少しも薄気味悪く感じなかった。都会の喧騒や

あわただしさに疲れ、先細りの収入で体裁を繕うことに汲々とする生活。それに比べて、ここでは果てしない地平線と澄み切った冷気が、新しい息吹をもたららし、心をいやしてくれる。少なくとも、ここには煩わしいおしゃべりをしたり、詮索する隣人はいない。地主が置いていってくれた二頭立て四輪馬車で、父とわたしは地所の見回りや、その外の簡単な代理人の用を果たした。その間、家事をしたり、煤けた古い家をびかびかに磨きあげたりするのは、妹の仕事だった。

このように、何の変哲もない単調な日々がしばらく続いた。そして、その年の夏のあゝる晩、思いもよらない事件が起こった。それを前触れとして、これからお話しする奇妙な出来事が次々起こることになる。

夕方になると、地主の小船を漕ぎ出すのがわたしの日課になっていた。タラを釣って夕食のおかずにするのだ。忘れもしないその日は妹も一緒に来て、船尾で本を読んでおり、わたしは舳先で糸をたれていた。すでに太陽は、アイルランドの岩だらけの海岸の向こうに沈んでいた。それでもまだ、夕焼け雲が放つ光彩で海はきらきら輝き、一面に紅の縞が描かれている。わたしは思わず立ち上がり、海や空一面に展開されたパノラマに見入った。と、そのとき、妹があつと小さな声をあげて、わたしの袖を引っばった。

「ねえ、見て！明かりよ。クルンバーの塔のところ」

首をめぐらせて、森の上にぬつと突き出た白い塔に目をやった。確かに窓の一つに明かりが見える。次の瞬間、それはふつと消えたかと思うと、今度はそれより上の窓が明るくなった。明かりはしばらくチラチラしていたが、次第に下の窓に下がっていき、ついに木々に遮られて見えなくなった。誰かがランプかロウソクを持って塔の階段を上がり、また下りて家のほうに戻ったのは、間違いない。

「いったい、誰だろう」わたしは自分に問うように叫んだ。妹に聞いても無駄なのは、その驚いた表情を見ればわかる。

「誰か、ブランクサム・ピアの住人が、あそこを調べに行ったのかもしれない」

妹は首を振った。「あの屋敷に足を踏み入れようなんて、誰も思わないわ。それに、家の鍵はウイグタンの管理人が持つてるもの。たとえ入ろうとしたって、入れないはずよ」

クルンバー館を守っている頑丈な扉と、重々しいよろい戸を思い出した。妹の言うとおりだ。ということとは、あそこにいた誰かは力づくで進入したか、鍵を手に入れたかしたことになる。もう釣りどころではなくなった。あれは誰だったのか、何の目的で忍び込んだのかを確かめようと、浜まで漕いで戻った。妹をブランクサムの家まで送ってから、漁師の中でも一番屈強な男を連れて、夕闇迫る荒野を歩き始めた。セス・ジェミスンという名の元水兵だ。

事情をセスに説明すると、とたんにその足が鈍った。「あの屋敷には悪い噂がある。そんなとこに夜行くもんじゃねえ。こげなところにお屋敷立てるなんて、無駄なことしたもんだ」

「でも、ほら、平気で入り込んでいるやつがいるじゃないか」わたしは、そう言っ
て暗闇にほの白く浮かび上がった大きな建物を指さした。さつき海から見えた明かりは、
一階の鎧戸を開けた窓の前を行ったり来たりしていた。その少し後に、もう一つ弱い光
が動いている。どうやら、二人の間がいるらしい。一人はランプ、もう一人は口ウソ
クを持って、建物を念入りに調べているようだ。

「管理人に任せておきやええ」セスはあくまでも言い張って、一步も動こうとしない。

「幽霊がクルンバー屋敷に取りついてるにちがいない。近寄らねえのが一番だ」

「おい、おい！幽霊が馬車に乗ってきたなんて言っんじゃないだろうね。じゃ、門の
そばに見える明かりはなんだい？」

「こりや本当だ！馬車の明かりだ」連れは少し落ち着きを取り戻して叫んだ。「ウエ
ストの旦那、あつちに行つて、どつから来たか調べてみつか」

今ではすっかり夜の帳が下りて、わずかに西の空に残光の帯があるだけだった。わた
したちはおぼつかない足取りで荒野を進んだ。ウイゲタン・ロードをたどって、クルン
バー館の入り口にあるりっぱな門柱までたどり着くと、門の前に二輪馬車があった。馬
が道端の草を食んでいる。

「間違いない！」空の馬車をじっくり調べてから、セスが言った。「マクニールさん
のだよ。管理人だから、鍵持つても不思議じゃねえや」

「ついでだから、挨拶しておこうかな。おや、出てきたみたいだ」

重い扉がぱたんと閉まる音がした。まもなく、二つの影が暗闇の中をやってきた。一
人はひよろりと背が高く、もう一人はずんぐりしている。二人はなにやら熱心に話しこ
み、門を過ぎるまでなかなかわたしたちに気づかない。

「こんばんは、マクニールさん」管理人とは顔見知りだったから、歩み寄って声をか
けた。小さい方がこつちを振り向いた。マクニール氏その人だったが、連れの男は飛び
上がった。

そしてひどく動揺した様子で、あえぎながら言った。「マクニール、こ、これは、い
つたい、なんだね？　こんなことは、聞いておらんぞ。ど、どういふつもりだ？」

「どうか落ち着いてください、將軍！大丈夫ですから！」おびえた子供をなだめすか
すように、管理人が言った。「こちらはフォザギル・ウエストさんです。どうしてこん
な時間にごここにお見えになったのか、わかりませんが…。でも、お隣同士になるのです
から、この機会にご紹介しておきましょう。ウエストさん、こちらはヘザストーン將軍
です。今度クルンバー館をお借りになることになったのです」

わたしが手を差し出すと、その男は一瞬たじろぎ、気の進まぬ様子で握手をした。

「こちらに伺ったのはですね、先ほど窓に明かりが見えたので、何かあったんじゃない
かと思っただけなんです」とわたしは説明した。「でも、来てよかった。おかげでお
近づきになれたのですからね」

この館の新しい住人は、暗闇を透かしてこちらをじつと窺っていた。そして、わたし

の話が終わると、長い腕をブルブル震わせながら突き出して、こちらの顔をランプの明かりで照らしたのだった。

「ああ、マクニール！」男はさっきと同じ震え声で叫んだ。「この人の顔はチョコレート色だ。イギリス人じゃないな。あなたはイギリス人ではありませんな？　そうではないよ？」

「ぼくは生粋のスコットランド人です」思わず吹き出しそうになったが、何とかこらえた。尋常でないおびえようだ。

「スコットランド人ですと？」將軍はほっとしたようにため息をついた。「じゃ、今は同じイギリス人だということですね。失礼しました。ええと…ウエストさんでしたな、わしはひどく気が立っているのですよ。さあ、ネイルさん、帰ることにしよう。一時間以内に戻らなきゃならん。では皆さん、お休みなさい！」

二人は馬車に乗り込み、管理人が鞭をぴしゃりとくれた。馬車の黄色い明かりは闇の中に遠のいていき、とうとう車輪の音も聞こえなくなった。

「セス、今度引越してきたあの人、どう思う？」長い沈黙の後、わたしは尋ねた。「ほんにあの人が自分で言ってたように、いろいろしてたかもしんねえけど…。あいや、普通じゃねえな」

「何かにびくついているんだよ。たった今怖い目にあってきたという感じだった。さて、そろそろ寒くなってきたから、帰ろっか」

わたしは連れに別れを告げ、荒野を急いだ。我が家の居間の明かりを恋しく思いながら。